

9月号 ごあいさつ

古典に学ぶ経営の心 — 「志」

「志」の失われた時代の経営とは！？

株式会社 山西 あすなる会顧問 西 垣 洋 一
代表取締役社長

「志」とは、自らの努力目標として心に決めていることです。単なる目標ではありません。目標があって、その目標を実現しようとする強い意思力を伴ったものが「志」です。

「知行合一」を唱えた陽明学者王陽明は、「志立たざるは、舵なきの船、銜なきの馬の如し。漂蕩奔逸して、終にまた何の底る所ぞや」— 志が立っていないのは、舵のない舟や銜のない馬のようなものであり、波のまにまに漂ったり、勝手に走り出したりしてどこへ行き着くかわからないと説明しています。「志」とは自分の行動を正しい方向に向かわせる羅針盤のようなものであり、これが確立していれば、わき道にそれていく心配も少なく、またそれだけで所期の目標に到達できる可能性を大きくするものと言えます。

また、『書経』では、「功の崇きはこれ志、業の広きは、これ勤なり」—高い功績は志があつてこそ得られるものであり、大きな業績は勤勉であつてこそもたらされると説明しています。つまり、大きな仕事をなし遂げるためには、「志」と「勤」がワンセットで必要だと言っています。

現在は「志の失われた時代」だと言われます。なまじ「志」などを口にすれば、気恥ずかしくなるような雰囲気さえあります。一方で現代は変化が激しく、うかうかしていると、すぐに激流に飲み込まれて自分を見失い、その時々的情勢に流されて、あてもなく社会を浮遊してしまうことになってしまいます。

昨今の世間に蔓延る「自分さえよければ」という自己中心的な考え方は、個人も企業も「志」を失ってしまったことが大きな要因ではないでしょうか。それが悲しい事件を生み、日本を代表する企業にまで及ぶ、考えられないような不正や不祥事となって顕在化しているのだと思います。

変化の激しい時代だからこそ、周りの状況や思惑がどうであろうと、いかに自分なりの生き方を貫くことができるかが大切になります。その鍵を握っているのが、「志」です。孔子は『論語』の中で「三軍も帥も奪うべきなり。匹夫も志を奪うべからざるなり」—どんな大軍でも、その司令官を捕らえることができる。だが、どんな人間でも、その「志」だけは奪うことはできないと説明しています。「志」を持つことができるかどうか、それを堅持できるかどうかは、その人自身の問題です。この言葉に孔子は、その覚悟を問うています。

経営の「志」とは、煎じ詰めれば、世のため人のために尽くすことです。大企業でも中小企業でも企業であれば、「利益」を追求することは当然であり、恥ずべきことではありません。ただそこには私利を追求しながらも、公益も合わせて考えなければなりません。各企業の「志」とは、その企業の創業の精神に基づく「経営理念」です。

木材販売を生業とする当社の経営理念は、「木を愛し森とともに育ちたい 快適な住まいづくりのパートナー」であり、行動基準は「価値ある商品ホットなサービス 広げる相互信頼の輪 明るい職場、豊かな人生」になります。創業来 66 年、時代が移り変わろうともこの基軸にぶれることなく事業を営んでまいりました。そしてこれからも経営理念の下、すべての社員が、何が正しくて、正しくないかの判断基準を持ち、何をなすべきかを考えて皆様と歩んで参ります。そして「新しい木の文化の創造」を図って参りたいと思います。

2018年9月吉日

首尾吟 — 睡起偶成の詩

不 信 人 間 耳 尽 聾	縦 令 日 暮 醒 猶 得	尚 多 昏 睡 正 憐 々	起 向 高 樓 撞 曉 鐘	起 向 高 樓 撞 曉 鐘	不 知 日 已 過 停 午	而 今 醒 眼 始 朦 朧	四 十 餘 年 睡 夢 中
---------------------------------	---------------------------------	---------------------------------	---------------------------------	---------------------------------	---------------------------------	---------------------------------	---------------------------------

信ぜず、 人間耳 尽く聾 ならんとは	縦令日暮れて醒むること猶得るとも	尚多くは昏睡、正に憐々	起つて高樓に向つて曉鐘を撞く	起つて高樓に向つて曉鐘を撞く	知らず日已に停午を過るを	今より醒眼始めて朦朧	四十餘年睡夢の中
-----------------------------	------------------	-------------	----------------	----------------	--------------	------------	----------

思えば、四十余年の人生を睡夢の中に過して来たが、いま、目を醒ましてみると、おぼろげながらも始めて真の相（すがた）が見え出した。日が正午を過ぎたように、人生の半ばを過ぎていたのも知らんでいたが、醒めてみるとじっとしては居られぬ。新たな「志」を抱いて、よしッ！起ち上がって高樓に向かつて曉鐘を撞くぞ。

かくて、起つて高樓に向かつて曉鐘を撞いたが、世の多くの人々は、今尚昏睡から醒めずに、夢幻の中にうとうとしている。けれども、こうして曉鐘を打ち続けて居れば、たとえ日が暮れてからでも、目を醒ますものがあるであろう。なぜなら、すべての人間が皆聾（つんぼ）ではあるまいから……。それを信じて「目を醒めよ！」とこの鐘を撞く。

孔子は「四十余年にして醒めた」のを「日すでに亭午を過ぐ」といつているが、孔子も「四十にして惑わず」といつているのを見れば、やはりこの年代が人生開眼の時かもしれぬ。しかし多くの人々は、四十になっても猶醒めず、むしろその頃から人生にトウが立って、いわゆる「初老」に入り、それまでの惰性にしがみついて、精神的にはうつらうつらのうたた寝状態に陥るのではなからうか。それを陽明は「起つて高樓に向かつて曉鐘を撞く」と、奮然起ち上っている。曉鐘は、他人に対して撞くだけではない。自からに対してのそれでもあるのだ。

曉鐘を撞いたから、それですべての人が皆目醒めるというものとは思わぬ。世の中はそんな甘いものではない。うるさい、やかましいと、逆に怒鳴るものも少なくはあるまい。しかし曉鐘を打つのをやめてはならぬ。打ち続けているうちに、1人でも2人でも目醒めて来る。すぐでなくてもよい。打ち続けていれば、日暮れになってからでも目醒める人があるであろう。

株式会社 山西 社長 西 垣 洋 一

